

仙台藩四代藩主伊達綱村公三百年 遠忌記念誌『伊達綱村公の遺徳を偲ぶ』 への寄稿について



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世
 仙台藩志会理事
 「政宗公ワールド」プロジェクト理事
 東北大学名誉教授・東北福祉大学特任教授

大 泉 道 鑑（康）

平成三十年六月二十日の仙台藩四代藩主伊達綱村公三百年遠忌を迎えるにあたり、綱村公の偉大な業績を偲んで多くの遠忌記念行事が企画された。そのひとつとして、綱村公の優れた実績を取りまとめた記念誌『伊達綱村公の遺徳を偲ぶ』が発刊された。この記念誌には、もとより「郷土の子供達や市民・県民に郷土に残された文化について興味を抱き、また綱村公の業績に思いをいたし、郷土への関心を深めて戴きたい」という願いが込められている。このような理念に基づいて、本記念誌は元仙台市博物館長東海林恒英先生の監修及び元仙台市博物館市史編集室長菅野正道先生の編集指導のもとに、御挨拶、御寄稿及び綱村公の

御実績とその貴重な関連資料が綱村公の縁の方々から寄せられて編集された。このように歴史学的観点から見ても内容が極めて充実しているため、本記念誌は仙台藩の政治史だけではなく文化史にも大きな足跡を残すと高い評価を受けている。

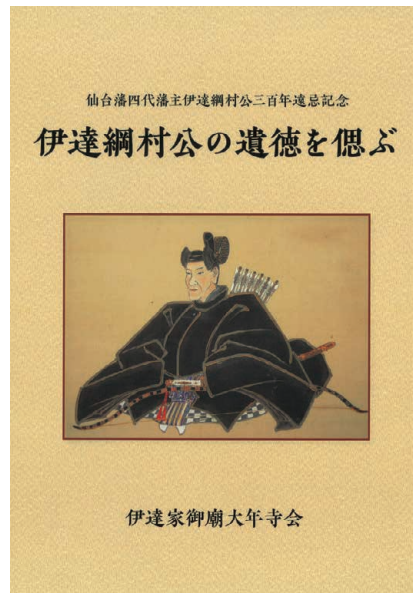
仙台藩茶道石州流清水派（当流）三世清水道竿（さおど）うかん・寛文二年（元文二年——一六六二——一七三七）は、当流を仙台藩に確立させただけに止まらず、全国各藩にも広めた貢献により石州流清水派の開祖とされ（桑田忠親編『茶道辞典』、しかも数奇大名として天下に名を馳せた綱村公の茶道指南役という大役も果たした（十世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』。綱村公は、三世道竿が開いた当流を終生心から愛し、その奥義を極めることが出来た。筆者は、藩政時代と些かも変わらぬ仙台藩のこの正式な茶道を現在継承しているため、記念誌の編集委員会から寄稿を依頼された。そこで、「綱村公の当流の確立と発展への多大な寄与」という題で投稿させて戴いた。今回、筆者の寄稿文を中心に、本記念誌の概略を全国の皆様にぜひ紹介したいと考え、筆を取った次第である。

先ず、本記念誌の表紙には、表表紙に国宝松島瑞巖寺

二十七世大林宗茂禅師により開山された東園寺所蔵の綱村公の肖像画、裏表紙に近衛家から綱村公が賜った牡丹紋の挿絵がそれぞれあしらわれており、一見していかにも格調高くしかも趣き深く感じられるこの二つの挿絵を紹介する。



裏表紙（挿絵）



表表紙

次頁に、本記念誌の内容の充実ぶりを表わしている目次を示した。更に、関係各位からの御挨拶の中から、伊達家十八代当主伊達泰宗様による「発行によせて」を選ばせて戴いた。

さて、第一章の「伊達綱村公の御事績」は、紙面の都合により割愛させて戴き、第二章の「御寄稿」の中から、茶湯に関する筆者の文を十九～二十二頁に転載させて戴いた。最終章である第三章の数多くの「関係資料」の中からは、紙面の都合上「趣意書」、「記念事業」及び「記念事業書」を末尾に示すに止め、筆を置くこととする。

謝辞

本記念誌に寄稿する機会を賜った伊達家十八代当主伊達泰宗様に感謝の意を衷心から捧げます。また、御指導・御支援を下さった元仙台市博物館長東海林恒英先生（監修）及び元仙台市博物館市史編纂室長菅野正道先生（編集指導）に厚くお礼申し上げます。更に、『関』への転載の許可を下さった伊達家御廟大年寺会前会長阿部和子様に深謝致します。

目次

一 挨拶

発行によせて	伊達家十八代当主伊達泰宗様	1
記念誌発行を祝つて	宮城県知事村井嘉浩様	2
発行に寄せて	仙台市長郡和子様	3
伊達綱村公によるご縁	両足山大年寺住職武内邦生様	4
綱村公礼賛	仙台藩志会会長伊達宗行様	5
祝辞	一般社団法人伊達家風文会理事長池田峯公様	5

第一章 伊達綱村公の御事績

伊達綱村公の御事績	7
一、亀千代から綱村へ	7
二、綱村公の藩政	7
三、綱村公の親族	13
四、綱村公と文化	14
五、綱村公の人となりと評価	16
伊達綱村公略系譜	19
伊達綱村公略年譜	20
綱村公ゆかりの神社仏閣	21

第二章 御寄稿

一、伊達綱村公の手紙	37
二、綱村公と塩竈く頁亭特令	42
三、釈迦堂の縁起と再建	46

元仙台市博物館長 東海林恒英

東園寺住職 千坂成也

孝勝寺貫首 谷川日清

第三章 関係資料

四、仙台湾茶道石州流清水派の確立発展に貢献した数奇大名伊達綱村公	49
仙台湾茶道石州流清水派宗家第十一世大泉道鑑	
五、「如幻三昧外集」に見える黄檗宗と仙台湾四代藩主伊達綱村	53
社会福祉法人共生福祉会 福島美術館学芸員 尾暮まゆみ	
六、大年寺山公園界隈へのご案内	60
東北工業大学名誉教授 松山正将	
七、東日本大震災で被災した大年寺山公園無尽灯廟の災害復旧について	64
仙台市建設局百年の杜推進部公園課	

あとがき

一、仙台湾伊達綱村公三百年遠忌記念事業趣意書等	67
二、三百年遠忌記念事業顕彰記念碑除幕式・植樹式	70
三、綱村公三百年遠忌記念事業協力者・御芳志者	73
四、伊達綱村公三百年遠忌関連記念講演会・企画展一覧	75
五、関連新聞記事等	81
六、伊達家御廟大年寺会の事業紹介と歩み 附陳情書等	89
七、主な参考文献	91

挿絵

- 表紙 伊達綱村公肖像画 東園寺蔵
- 裏表紙 近衛家から綱村公が賜った牡丹紋



発行によせて

伊達家十八代当主 伊達泰宗

本年は、仙台藩四代藩主伊達綱村公三百年遠忌の年にあたります。公は三代藩主綱宗公の長男として万治二年（一六五九）江戸浜屋敷に誕生されました。幼名は亀千代。同三年八月、故あって徳川幕府より通塞を命ぜられた父綱宗公に代わり僅か二歳で四代藩主を継がれました。寛文九年（一六六九）十一歳で元服、將軍家綱の偏諱を賜り綱基と名乗り、延宝五年（一六七七）綱村と改名しました。世に言う「伊達騒動」の後、幕府老中稲葉正則の息女仙姫と婚約し、仙台初入国は十七歳の時であります。公は、それまでの後見政治を改め、藩主主導による政治を展開し、諸制度の改革や産業の振興に尽力されました。また、自ら儒学を学び学問育成の奨励や『治家記録』等の史書編集にも当たっています。特に綱村公は歴代公の中でも信仰心篤く、黄檗宗の高僧鉄牛を招き大年寺を建立、加えて亀岡八幡の造営や鹽竈神社の修築を行うなど、仙台藩文化の発展に大きな影響を与えると共に様々な治績を残された名君と呼ばれております。

綱村公が眠る大年寺山伊達家歴代御廟は、公がこの地に黄檗宗の大年寺を開基され、以後歴代藩主の墓所と定めた所であります。この時代から瑞鳳殿のような御霊屋を廃止し、一定規格の墓碑に上屋のみ（現在は墓碑のみ）となりますが、これは公の遺命「先に従い毎世廟建てなば後世子孫何を以って保たん、我死せば墓石を建て、瓦葺の屋根を覆うまでにすべし」によるものであります。

改めて公のご生涯を思いいます時、戦後激動の時代を生きた父十七代当主貞宗の長男として、綱村公終焉の地である管ての麻布下屋敷（東京都港区）にて生まれた私は、十五歳の時、戦災で焼失した御霊屋瑞鳳殿の再建に伴う発掘調査に遺族として立ち会い、政宗公の御遺骨と対面した時、仙台へ戻ることを決意致しました。父亡き後、瑞鳳殿、感仙殿（二代藩主忠宗公御霊屋）尊応殿（三代藩主綱宗公御霊屋）の再建工事、並びに四代藩主以降歴代の墓所が置かれます大年寺山伊達家御廟の整備事業と山門の建立、そして、先の東日本大震災で甚大な被害を受けました県内外に置かれます墓所の改葬及び改修工事につきましては、関係当局のお力と全国から賜りましたご支援の下、無事見届けることができました。四代藩主綱村公が逝去されてから三百年、そして公の誕生から三百年後にあたる昭和三十四年（一九五九）、十八代目当主として生を受けた我身と綱村公の生きた時代、其のめぐり合わせを深く感じております。

最後になりましたが、長きにわたって伊達家御廟をお守り頂いております伊達家御廟大年寺会の皆様には、当主として深く感謝申し上げます共に、綱村公の御加護があらんことをご祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。

平成三十年六月

寄稿四 仙台藩茶道石州流清水派の確立・

発展に貢献した数奇大名伊達綱村公

仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世
「政宗公ワールド」プロジェクト理事 大泉道鑑

仙台藩茶道石州流清水派（当流）を仙台藩内に確立し発展させたのは、当流の茶道頭三世清水道竿（寛文二年・一六六二年〜元文二年・一七三七年）である。平成三〇年（二〇一八）は、当流の発展の過程において多大な貢献をした四代藩主伊達綱村公（万治二年・一六五九年〜享保四年・一七一九年）の没後三〇〇年を記念し、その遺徳を偲んで、「綱村公没後三百年遠忌法要」が六月二〇日の命日に綱村公以降の歴代藩主が眠る墓所（大年寺無尽燈）で、厳かにまた盛大に執り行われた。この法要には、筆者も仙台藩志会の一員としてまた、当流の宗家として、格別の敬意と感謝の念を持って参列した。そこで今回、「伊達文化」の中心的存在であり続けてきた当流の発展に寄与した綱村公の偉功について、伊達家の正史として有名な『伊達家治家記録』等の各種文献に基づいて述べる。

綱村公は、万治二年（一六五九）三月八日、三代藩主伊達綱宗公（寛永一七年・一六四〇年〜正徳元年・一七一一年）と側室淨眼院（三沢初子、鳥取藩士三沢清長の娘）（寛永一六年・一六四〇年〜貞享三年・一六八六年）の嫡男（長男）として生まれた。万治三年（一六六〇）、綱宗公（寛永一七年・一六四〇年〜正徳元年・一七一一年）がある理由で、二一歳で幕府から隠居を命ぜられた。これが、寛文事件と称されたあの有名な仙台藩の御家騒動「伊達騒動」の発端となった。その結果、綱村公は弱冠二歳で襲封し、それに伴って、伊達家の二人の重臣がその後見人に任ぜられた。そのため、綱村公が藩政の表舞台で本格的に活躍したのは元禄時代以降で、元禄文化が見事に開花した時期と重なり、それを追い風にして文教政策を推進した。初め綱村公は特に儒学の

振興に力を注ぎ、多くの優れた儒学者を召し抱え、その中で抜きん出た田辺希賢（承応二年・一六五三年〜元文三年・一七三八年）に『伊達家治家記録』の編纂と言う大事業を命じた。

ご承知の通り、綱村公は幕府老中稲葉正則（小田原藩々主 元和九年・一六二三年〜元禄九年・一六九六年）の息女仙姫（万治二年・一六五九年〜宝永三年・一七〇六年）と結婚したため、岳父正則は藩政全般を指導しただけではなく、茶道や仏教に極めて造詣が深かったため、それらの面でも多大な影響を及ぼしたようである。その後、綱村公の宗教や芸術に対する執着が度を越す事もあったため、時には正則からもたしなめられた。この記事からも、そのひたむきさを窺う事ができよう。

一方、四代將軍徳川家綱（寛永一八年・一六四一年〜延宝八年・一六八〇年）の茶道指南役となった石州流の流祖片桐石見守貞昌（石州）（大和小泉藩々主 慶長一〇年・一六〇五年〜延宝元年・一六七三年）は、徳川將軍家の茶道規格を定めた、世に言う「石州流三百箇條」を家綱に提出した。その後、石州流は全国各藩にも広められ、それぞれ独自に大名茶として発展を遂げて現在に至っている。綱村公は茶道については、まず石州の高弟で茶道頭二世清水動閑（慶長一九年・一六一四年〜元禄四年・一六九一年）から指南を受けた。なお、二世動閑は「石州流三百箇條」の註解書『清水動閑註解石州流三百箇條』及び『動閑茶湯書』を著し、仙台藩の茶道を石州流にする基盤を固めた。この両著書に加え、二世動閑筆『淡紙庵之記』及び老中松平康福（浜田藩々主 享保四年・一七一九年〜寛政元年・一七八九年）自画賛（自ら書いた書と画）の「片桐石見守宗閑居士像」（写真1）の二つの掛軸は当流の「三種の神器」の役割を果してきており、代を継承した証として当流の歴代の茶道頭・宗家の手を経て、筆者に手渡された。

二世動閑没後、綱村公が自らその後継者に指名したのは、実子の清水快閑ではなく、一門で実力が傑出していた馬場道斎、後の三世道竿であった。道



写真1 『片桐石見守貞昌宗閑居士像』
妙閑子(松平康福)自画賛

竿を三世に継承させた経緯については、十世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』に詳述されているので、それを参照して頂きたい。網村公は、元禄五年(一六九二)三世道竿に石州流鎮信派の祖・松浦鎮信(平戸藩主 元和八年・一六二二年〜元禄一六年・一七〇三年)に師事するよう命じた。更に、特別な取り計らいを網村公が自ら行つて、石州没後石州流の第一人者となった石州流宗源派(藤林流)の開祖、藤林宗源(片桐家々老 慶長一一年・一六〇六年〜元禄八年・一六九五)に師事させたので、三世道竿は幸運にも既に高齢に達していた宗源から直接台子伝授を受ける事ができた。

さて、網村公の治世の『青山公治家記録』の寛文九年(一六六九)三月一日九日条に当時一歳の網村公の茶会に関する最初の記述が次の通りである。

於^レ茶事アリ。兵部大輔殿、右京亮殿、修理殿宗永、桑島孫六殿入来、
掛軸盧堂書茶入小御用茶碗花菱面茶抄利休釜茶屋茶入盆茶入青磁

三世道竿が網村公により茶道頭に任ぜられた元禄五年(一六九二)以降、茶

会の記事が増加の一端をたどった点が注目される。元禄六年(一六九三)から宝永二年(一七〇五)までの一三年間の網村公の仙台城及び江戸邸における茶会は、実に一三〇〇回以上も催されている。その冒頭の元禄六年の一〇月二三日条の茶会では、岳父正則の嫡子老中稲葉正通(後の正往 寛永一七年・一六〇四年〜享保元年・一七一六年)を招き、伊達政宗公(永禄一〇年・一五六七年〜寛永一三年・一六三六年)が徳川家康(天文一一年・一五四二年〜元和二年・一六一六年)から拝領した名品清拙墨跡が床に飾られた。また、晩年の元禄一五年(一七〇二)に行つた茶会は、驚くべき事に三三六回にも達している。これらの記事からも網村公が茶道にいかにか精進していたか、容易に推察できよう。ところが、網村公が頻繁に茶会を催しただけではなく、茶道の探求に励み、その奥義を極めた事をよく示す資料が少なからず残されている。

その代表的なものとして、宗源、二世動閑及び三世道竿等の記録や談話を研究して会得する事ができた茶道の精神について記した『数奇秘密相伝』をまず挙げる事ができる。次に、網村公著『如幻三昧集雜著』に収載されている「茶人説」及び「茶説」がある。これらには、茶人のあり方及び茶道の精神についての考えがそれぞれ述べられている。この詳細についても、『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』に記述されているので、その箇所を参照されたい。なお、歴代の茶道頭・宗家の手を経て、筆者が所蔵している網村公筆の掛軸(写真2)と併せてこの解説と解釈を次頁に示した。

ここで、網村公の茶道人生に最も大きな影響を与えた茶道指南役・三世道竿の功績について簡潔に述べる。まず第一に、三世道竿を茶道頭に抜擢して頂いた網村公の並々ならぬ期待に応えるべく、創意・工夫を凝らしてこの流儀の芸術性、またその完成度を一層高めつつ茶道の奥義を究めて当流を開いた。ところが、この流儀を仙台藩内に確立させただけではなく、全国各地にも広める努力を怠らなかつたため、全国各地に三世道竿の人脈が形作られた。

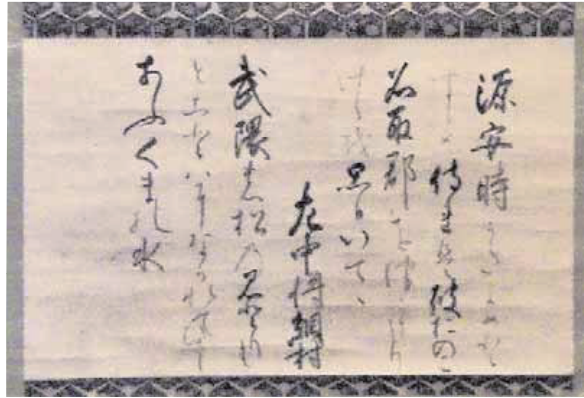


写真2 綱村公御歌及びその解説・解釈 筆者所蔵

(大意)

源安時うたよめと
す、め侍れば彼おのこ
名取郡をつかさどり
けるを思ひいで、

左中将綱村

武隈の松のみどりも
とことばにながれてひさし
あぶくまの水

【解説】十世大泉道鑑

松岡安時から和歌を詠んで欲しいと
言われたが、彼が名取郡一帯を司どっ
ていたのでこれに因み次のように詠んだ

左中将綱村

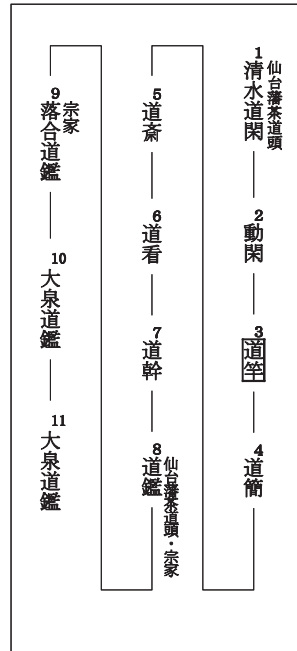
古来歌に読み継がれて来た

阿武隈の松は(お前の名の松のように)
未来永劫に変らぬ緑であるうぞ
この地を流れ行く阿武隈川のように

その中で三世道竿は、徳川幕府の茶道方で重要な役割を果たす数奇屋頭(格)の谷村三育(？宝暦三年・一七五三年)等茶道方に仕えていた茶人に茶の湯伝授を行なっており、徳川家の石州流茶道にも大きな影響を与えていた事実が特に筆者の目を引いた。

ところで、先に述べた筆者が所有している天下一品の掛軸『片桐石見守貞昌宗閑居士像』を入手したのは、三世道竿の後継者の四世清水道簡(享保元年・一七一六年〜天明三年・一七八三年)である。この掛軸の自画像の老中康福の茶の湯の師匠が三育であったため、四世道簡と三育の共通の師が三世道竿であったと言う太い絆により、四世道簡が入手できたのではないかと考えられる。ところで、全国の石州流各派の茶道人口の中で、各地の石州流清水派のそれを総計すると、現在でも最も多いと言われている。三世道竿を祖とする清水派が、全国津々浦々へ広がりを見せたのは、この流儀が芸術的に極めて優れていた事だけではなく、綱村公の絶大な支援のもとに、三世道竿の日頃の茶道指導に対する並々ならぬ熱意が見事に結実した結果であると考えられる。

次に注目すべき三世道竿の事績として、『侘び茶』を大成した千利休(大永二年・一五二二年〜天正一九年・一五九一年)の理念を重視した茶の心構えに関する茶の湯伝書『道竿拾鉢』を著した事を挙げる事ができる。この伝書は、前に述べた二世動閑の著書である『清水道閑註解石州流三百箇條』(『動閑茶湯書』を含む)と双璧と並び称される重要な文献であると学術的に高く評価されている。従って、当流ではこれを最も重視してきたものである。この内容の詳細については、筆者及び母・十世大泉道鑑(明治四二年・一九〇九年〜平成二二年・二〇一〇年)による解説の研究成果が、学会誌『茶の湯文化学』(二十八号)に最近掲載されたので、それを参照して頂きたい。なお、今まで述べた事績に加えて、大崎市にある池泉回遊式庭園の旧有備館庭園、旧阿部家庭園、名取家庭園及び登米市の旧亘理氏庭園は、三世道竿によって



仙台藩茶道系図(茶道頭及び宗家)

造られた遺構である。これらの日本庭園は、色褪せる事なく今に息づく「伊達文化」の貴重な遺産であり、三世道竿の作庭の優れた才能を垣間見る事ができる。これまで述べた数々の業績から、三世道竿は当然ながら当流の流祖(一世)と称してもよいと言われていたが、自らは仙台藩茶道の茶道頭・清水家を継承する者として三世と称したのである(系図を参照)。この芸術的に完成度の高い当流の「雅た侘び」とその真髄は、これ以降歴代の茶道頭・宗家から筆者の代まで伊達家と共に歩み、藩政時代のままほとんど変る事なく連綿として継承されてきた。これは極めて稀有な事で、当流はかけがえのない「伊達文化遺産」と言えよう。

以上述べてきたように、綱村公は清新な気風がみなぎった元禄文化を背景に、文教政策を積極的に推進した高度な文化人であった。特に、三世道竿を側面から支えながら生涯こよなく愛して止まなかった当流の確立と更なる発展に大きく貢献した立役者だった事は、紛れもない事実である。このような理由から、綱村公が日本屈指の数寄大名として天下に名を馳せ、また、専制政治に対する批判は多少あるのも事実であるが、仙台藩の歴代の藩主の中で、政宗公に次ぐ名君として今でも人々の心に生き続けている所以であろう。元

禄一六年(一七〇三)、綱村公は養嗣子の五代藩主伊達吉村公(延宝八年・一六八〇年)宝暦元年(一七五二年)に後を託して隠居した。享保四年(一七一九)六月二〇日没す。享年六一。法名は大年寺殿青山全堤大居士。なお、吉村公の茶道指南役と言う重責も、三世道竿が見事に果たした。

参考文献 (五十音順)

- 『片桐石見守宗閑居士像』老中松平康福(妙閑子)自画賛 十一世大泉道鑑蔵
- 『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎監修 淡交社 昭和五〇年
- 『茶道辞典』桑田忠親編 東京堂出版 昭和四三年
- 『清水動閑註解石州流三百箇條』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵
- 『清水動閑註解石州流三百箇條 付仙台藩茶道』十世大泉道鑑蔵
- 丸善出版サービセンター 昭和五五年
- 『数奇秘密相伝』伊達綱村 仙台市博物館蔵
- 『伊達家治家記録』伊達家編纂 仙台市博物館蔵
- 『伊達綱村茶会記』酒井巖 中央公論事業出版 昭和四三年
- 『茶の湯文化学』(二十八号)『道竿拾粹』十世大泉道鑑、十一世大泉道鑑蔵
- 平成二九年
- 『道竿拾粹』三世清水道竿 東北大学中央図書館蔵
- 『動閑茶湯書』(十八冊)二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵
- 『如幻三昧集雜著』「茶人説」、「茶説」伊達綱村 仙台市博物館蔵
- 『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』
- 文化庁・宮城県教育委員会 平成二八年

趣 意 書

平素、震災復興や地域振興に御尽力なされている皆様、心より敬意と感謝を申し上げます。

さて、この度の東日本大震災により倒壊しました大年寺山の仙台藩歴代藩主等の御廟も仙台市・伊達家・各界の皆様方のお力添えにより復旧し、歴史公園としての趣を整えることができました。この山を愛する市民として心より感謝御礼申し上げます。

今日、仙台市民公園（大年寺山公園）として、また大年寺山風致地区（六七・二ha）として指定されています園内には、第二次世界大戦後の復興の象徴として作られた野草園が市民の憩いの場としてあります。

また、この地は古くから人々が活動した痕跡が見られ横穴墓群が造られています。中世には栗野氏の居城（茂ヶ崎城）が築かれました。江戸時代に入り、仙台藩四代藩主伊達綱村公開基の黄檗宗（禪宗）両足山大年寺が発心・建立され（一六九五年）以来伊達家の菩提寺となりました。山内には七堂伽藍と二十余の塔頭を持ち三百人からの僧を擁す大寺院であり瑞巖寺と並び称されていた大刹でした。

時が移り明治の廃仏毀釈により大伽藍は解体されましたが、綱村公の遺言により、綱村公以降の歴代藩主と夫人は山内の無尽灯廟・宝華林廟に祀られています。

ます。（綱村公の遺命「先規に従い毎世廟を建てなば後世子孫何を以て保たん、我死せば墓石を建て、瓦葺の屋根を覆うまでによべし」によるものであり五代吉村公は遺命に従い、その後の藩主は墓碑のみとなりました。）

綱村公の治世は四十二年間でありましたが、この間産業・経済の振興、学問・文化育成、領民の心の癒し和みの場となる榴岡公園の造成、等々に尽力され今日に至るまで郷土に誇りと生活の潤いを与えてくれています。

願いますとこの山が市民公園となるまで幾多の困難がありました。昭和二十五年には環境保全のための「大年寺山保勝会」が時の各界有志（島海玄太郎氏・一力次郎氏・知徳一郎氏・平澤西治氏等）により成されました。この山に心を寄せる方々の篤い心も連なり、この霊域の保全のため「大年寺会」が組織され、名誉会長には第十七代御当主伊達貞宗氏、会長は伊達篤郎氏、顧問には仙台市長島野武氏、一力一夫氏、亀井文蔵氏、三原良吉氏等が名を連ね、御廟保全活動と綱村公の御命日にあたる六月二十日、歴代藩主と夫人の慰霊祭が永年続けられています。この活動は現在も「伊達家御廟大年寺会」（平成二十六年九月名称変更）へ継承されております。

また、十余年前より地域小学校児童に呼びかけをし、毎年十二月の落葉清掃に参加して頂くようになり、清掃後には仙台市の施設である茂ヶ崎庵

において児童・保護者等に十八代当主伊達泰宗様より歴史講話をして頂いております。明日を任う子供達に郷土の自然や歴史を学ぶ良い機会になっています。また、近年、地元町内会・歴史研究会の方の清掃活動参加も続いています。

いま、大年寺山は、いにしえの大いなる歴史遺産と新しく整備された緑地帯が融合し、市民にとり文化の息吹をも持たす市民公園となりつつあり、まさに文化観光立国としての振興にも連なる地になっております。

さて、こうした歩みを踏まえまして平成三十年に仙台藩四代藩主伊達綱村公三百年遠忌を迎えます。この節目の年にあたりまして、広く市民各位の御協賛のもとに、綱村公を顕彰し、後世に伝える記念の事業を列添のとおり推進できずならば、望外の喜びであります。つきましては、御貴殿の御高配と御指導を賜りたくお願い申し上げます。

平成二十八年九月吉日

主催者 伊達家御廟大年寺会

共催者 仙台藩志会

共催者 一般社団法人伊達家風文会

記念事業

一、長興山紹太寺のしだれ桜の幼木を仙台藩四代藩主伊達綱村公以降歴代藩主・夫人の眠る大年寺山公園（仙台市民公園）に植樹する記念樹は、この度の伊達綱村公三百年遠忌に際し、神奈川県小田原市の長興山紹太寺

住職武内徳昭様より寄贈されます

（注）この桜は伊達綱村公の夫人である仙姫の父君（小田原城主稲葉正則公―時の幕府老中）が、父母と祖母である春日局の霊を弔うために創建した稲葉氏一族の菩提寺である紹太寺にその時植栽された桜（小田原市指定天然記念物。かながわ名木百選）です

一、綱村公の功績・事績の検分及び冊子化

（政宗公の事業を更に継承、拡大、又、新たな事業化は益々の産業育成・文化教育等々に及び今日この地にいきづく伝統の基を成し、仙台藩を盤石なものとししました）

一、綱村公三百年遠忌に關しての記念石碑

平成二十八年九月吉日

主催 伊達家御廟大年寺会

共催 仙台藩志会

共催 一般社団法人伊達家風文会

仙台藩伊達綱村公三百年遠忌記念行事

一、顕彰記念碑除幕式・植樹式

・平成三十年四月七日（土） 十一：〇〇 大年寺山市民公園 無尽灯廟前

○顕彰記念碑除幕 ○記念植樹 ○綱村太鼓演奏

二、三百年遠忌法要

・平成三十年六月二十日（水） 十一：〇〇 大年寺山市民公園 無尽灯廟

三、三百年遠忌法要御斎会

・平成三十年六月二十日（水） 十三：三〇 青葉城址本丸会館公開

○記念演奏（聖ウルスラ学院吹奏楽部） ○献吟（後藤岳宗氏）

四、特別企画事業 講演会

・平成三十年六月十五日（金） 十三：四〇

○「四代藩主伊達綱村の時代」講師：菅野正道氏

参考文献（五十音順）

『訓注如幻三味集』 能仁晃道訓注 東園寺 平成三十年

『茶道辞典』 桑田忠親編 東京堂出版 昭和四十三年

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』 十世大泉道鑑

丸善出版サービスセンター 昭和五十五年

『伊達家治家記録』 仙台市博物館蔵

『伊達綱村公の遺徳を偲ぶ』 東海林恒英監修、菅野正道編

集指導 伊達家御廟大年寺会遠忌記念事業委員会 令

和元年

『伊達綱村茶会記』 酒井巖 中央公論事業出版 昭和四十三年

『茶の湯文化学』（二十八号）「道竿拾躰」 十世大泉道鑑、

十一世大泉道鑑 平成二十九年

【解説】

右の筆者所蔵の大棗は、伊達家十八代当主伊達泰宗様から「六十二万石」の銘を戴いたものである。この大棗は、泰宗様の取り計らいにより、東京国立博物館中島淑枝氏が先代十世大泉道鑑のために製作した。大棗の表側は、総高蒔絵で伊達家の家紋「竹に雀」が描かれ、その内側は総梨子地で蓋の内側には泰宗様の花押が印されている。この大棗こそは、伊達家と当流の茶道頭・宗家の永遠の太い絆を象徴する芸術品である。

